

---

# 卒業

久里屋りいた

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

卒業

### 【Nコード】

N1841Y

### 【作者名】

久里屋りいた

### 【あらすじ】

3月の晴れた日。僕らは卒業する。

晴れた日だから。

さよならを言おう。

これが。

最後になるのだから。

三年間休まず通った、高校の卒業式。

桜はまだ咲き始めたばかりで、入学した時と違う景色だ。

桜舞う中の門をくぐり、校舎まで歩いた。

胸の高鳴りは緊張や不安や、期待に喜び。

どんな事が待ち受けているのか、踏み出すまでは分からない。

ゲームにも似た感覚だが、画面からは感じられない物に溢れている。

深呼吸して校舎に入ったこと、今でも忘れずに記憶として刻まれていた。

勉強して友人とバカやった、教室から背を向け歩き出す。

思い出を懐かしみながら、階段を下りて昇降口へとやってきた。

登校と下校時間は人で賑わうここは、静まり返って殺風景だ。下駄箱を開いて靴を取り出して、上履きはビニールに閉まう。

閉じたそこにある名前入りテープを剥がし、クシャクシャにしてズボンのポケットに入れた。

明日からはもう、ここを使うことはない。

校庭に出れば卒業生が思い思いに過ごし、最後の瞬間を惜しむ光景が広がっている。

「やっと来たか。写真撮影するぞ」

「はいよー」

呼ばれた声の方へ走り、友人達と写真を撮った。

この制服に袖を通して映るのも、もう無いのだと思うと物悲しい。服を選ばなくて便利だぐらいにしか考えていなかったが、長年と着慣れたコイツには愛着がある。

今日までありがとな。

賑やかな声に包まれる中に、一人だけ校舎を仰ぎ見る。

外観をまともに見たのなんて、学校案内のパンフレット以来だ。時計がちょうど12時を指し示す。

シンデレラなら魔法が溶ける時間だ。

「お世話になりました」

一礼をしてから顔を上げて、さよならと声には出さず手を振る。笑えていたかは分からない、自分の顔は自分では見えない。ただ頬に熱い雫が流れていたこと、気がついたのは黙って友人にハシカチを差し出されたから。優しさに感謝して涙を拭いて、また輪の中へと戻っていく。

1日では語り尽くせない思い出があった。楽しかった日々が、ここから始まり終わる。

1ヶ月もしない内にこの校庭は、新入生で溢れるのだろう。そのとき僕らは他の場所で、新たな未来を歩み始めている。

それが成長すること。大人になるということ。

卒業証書が入った筒を手に、笑顔の友人たちと門をくぐる。

僕らは高校を卒業した。

END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1841y/>

---

卒業

2011年11月3日17時08分発行